第４学年　国語科学習指導案

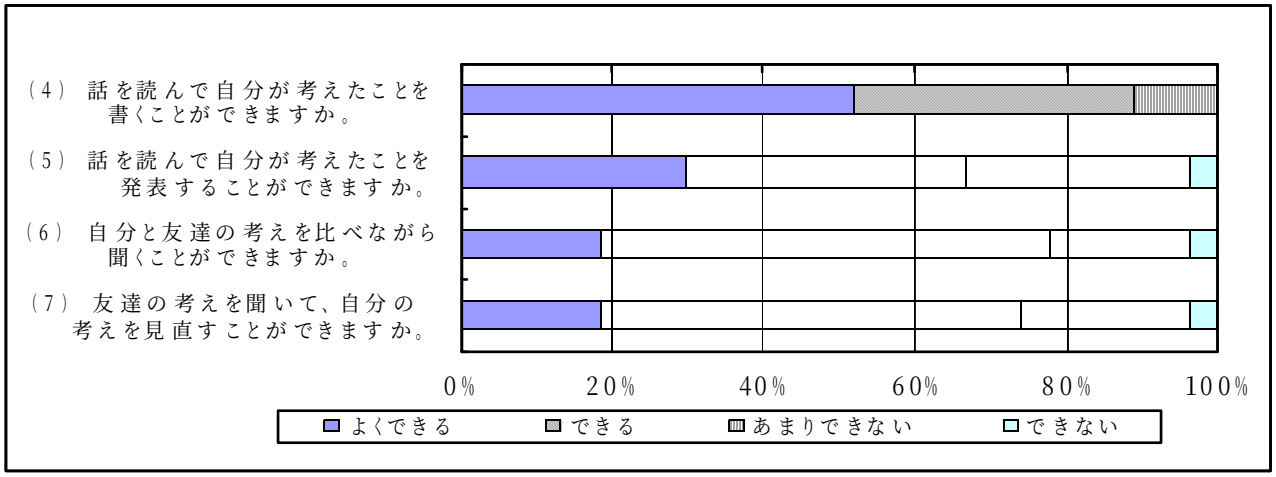
国語科研究室

1　単元名　　学習したことを生かして　　「ごんぎつね」

2　指導観

○　本学級の児童の実態

国語の学習に対する意識調査からは次のような結果が見られた。（２７名回答）



自分の考えを書くことはできても，その伝え方が苦手な児童が多いことが明らかになった。これは，書いたことの根拠を明確にできていないために，自分の書いた内容に自信がもてないことが原因だと考えられる。また，考えを比べながら聞き，見直すことが苦手な児童も多い。これも，考えの根拠が曖昧なために，考えを比べたり，見直したりする視点が明確でないことが原因として挙げられる。

以上のことから，児童が根拠を明確にして自分の考えをまとめ，伝える力を身に付けるために，考える筋道を意識させ，自分の考えを創り上げることができる学習を展開していくことが必要であると考える。

読むことの学習においては，これまでに「三つのお願い」「白いぼうし」「一つの花」の学習を通して，読みのめあてに沿って，人物の気持ちや人柄を読み取る学習をしてきている。その中で，各場面で中心となる文を基に，情景を想像しながら人物の気持ちを読み取り，その人柄や物語を貫く人物の心を考えることができるようになっている。しかし，根拠とする叙述をはっきりさせることはできても，その叙述からどのように考えたかという解釈をし，それらをつないで人物の人柄や物語を貫く人物の心を書きまとめることはまだ十分とは言えない。

そこで，本単元では，叙述を基に読み取った内容と，自分の経験をつないで，書きまとめる手順を明確に提示し，人物の気持ちに迫ることのできる読みの学習を展開した。

○　本教材の価値

本教材は，いつもひとりぼっちで生活していたごんが，自分と同じひとりぼっちになったと思い込んだ兵十に，自分の存在に気付いて分かり合いたいと願うが死をもってしか分かり合えなかったひとりぼっちのさみしい心を描いている物語文である。文章構成の特質としては，６つの場面で構成されていて，「いたずらをするごん」「反省し後悔するごん」「つぐないをくり返すごん」「兵十の後をついていくごん」「兵十に気付いてもらってないことを知ったごん」「兵十にうたれるごん」と展開していく。その中で，ごんの言動に着目し，ごんの気持ちを読み取りをもとに，奥底にあるごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を読み確かめることができる教材である。

また，文章表現の特質としては，心内語や類義語，繰り返しの表現，文末表現などをもとにした，登場人物の気持ちの読み取りや，場面をつないでの登場人物同士の関係や気持ちの動きの読み取りができることが挙げられる。そのため，場面をつないで物語全体を貫いている主人公の心を確かめるのに適した教材である。

さらに，各場面で，ごんと同じような経験がなかったかを振り返り，読み取ったごんの気持ちと比べて見直すことで，客観的にごんを見ることができ，物語を貫くごんのひとりぼっちのさみしい心の中身について，自分の考えを創ることができるものと考える。

○　自分の考えを創る指導のあり方

４年生の読むことの学習において，自分の考えを創るとは，場面ごとに読み取った人物の気持ちを，自分の経験とつないで見直し，その気持ちの奥底にある思いについて考えをもつことであると考える。

つまり，本単元における創らせたい自分の考えとは，各場面で読み取ったごんの気持ちを，自分の経験と照らし合わせて，共通点と相違点から，ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を深めたり，広げたりして，具体的にとらえることと考える。

○　自分の考えをつくるための視点と手順

(1) 自分の考えの内容に迫るための視点

各場面の中心文を基に読み取ったごんの気持ち

(2) 自分の考えをつくる手順

【ア　思考の筋道】

①　各場面のごんの気持ちを読み取る。

②　ごんの行動につながる自分の経験を振り返り，その時の自分の気持ちを出し合う。

③　出し合った自分の気持ちと，読み取ったごんの気持ちの共通点や相違点をもとに，ごんの気持ちの奥底にある心の中身を考える。

【イ　書きまとめる内容】

①　各場面で読み取ったごんの気持ち。

②　振り返った自分の経験とその時の気持ち。

③　自分の経験とつないだ共通点や相違点をもとに深めたごんの気持ちの奥底にある心の中身。

○　指導にあたって

指導にあたっては，次のような支援や手立てを取り入れていく。

まず，人物が題名に取り上げられていることから，人物そのものが大きな役割を担っていることをふまえ，「ごんぎつねがどんなことをするのだろう。」「特別なきつねなのだろうか。」ということを意識しながら冒頭を読んでいく。冒頭では，語り手が小さい時に聞いた話を数十年たった今でも忘れずに人々に伝えていることをおさえ，題名での疑問とつなぎ，そこまで語り手の心に残ったものは「ごんぎつね」の話の何なのかという読みのめあてをつくる。

次に，読みのめあてに沿って全文を読み，ごんの行動を追っていくことで，「語り手である『わたし』の心に残っているのは，ごんのひとりぼっちのさみしい心である。」という読みのめあての答えを書きまとめる。そして，各自の読みのめあての答えを交流し，読み取ったことの共通点や相違点を明らかにして，学級の読みのめあての答えを方向付ける。読みのめあての答えを方向付ける際に，「わたし」の心の中に残っているのは，ごんのどんなさみしい心なのか，確かに読み取れていなかったことや，もっと詳しく知りたいことを明らかにする。さらに，各場面のごんの気持ちを読み取るのに手がかりとなる中心文から何を読み確かめていけばいいのかを考え，学習計画を立てる。

読み確かめでは，学習計画に沿って，場面ごとに立ち止まる中心文を基に，ごんの気持ちを読み取り，ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を読み確かめていく。ここでは叙述を基に，ごんの気持ちの動きとその奥底に貫かれているひとりぼっちのさみしい心の中身を読み確かめる。その際，各場面で読み取ったことを自分経験と照らし合わせて比べる。その共通点からは共感したごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を，相違点からは自分たちとは比べられないほど孤独な状況にいるごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を，自分の考えとして具体的に書きまとめさせる。

最後に，読みのまとめで，題名にもどり，人間である兵十に対し，ごんが「きつね」であるという宿命を背負っているということに気付かせる。その上で，ごんがどんなことをしても死をもってしか分かってもらえず，ひとりぼっちのさみしい心のままであったことが語り手の心に残ったという読みをまとめる。さらに，ごんの気持ちの動きや，ごんと兵十の関係を読み取り，ごんのさみしい心の中身を読み確かめるために，心内語や類義語，繰り返しの表現，文末表現などを読む読み方を使ったことについてまとめる。

3　単元目標

○　同じひとりぼっちと思い込み，兵十になんとか自分の存在に気付いてほしい，分かり合いたいと願ってつぐないをくり返したにもかかわらず，死をもってしか分かり合うことができなかったごんのひとりぼっちのさみしい心を読み取ることができる。

●　類義語や文末表現に着目して人物の気持ちを読む，場面と場面をつないで人物の気持ちの動きを読む読み方を身に付けることができる。

◎　各場面の中心文を基に読み取ったごんの気持ちを，自分の経験と照らし合わせて見直し，各場面に貫かれているごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を自分の考えとして創ることができる。

4　単元計画　全１６時間

過程	時	主な学習活動と内容	指導上の留意点
読みのめあて	1	1　単元名から学習の構えをもつ。 2　題名から考えたことや疑問に思ったことを出し合う。 ○　題名が人物の名前になっていた時の題名の働きをとらえること。 3　題名と冒頭をつないで読み，読みのめあてを生み出す。 ○　語り手が登場して，長い間語り継がれている意味をとらえること。	○　きつねについてのイメージを出させ，マイナスのイメージが強いことに気付かせておく。 ○　語り手が小さい時に聞いた話なのに，今も忘れられずにいることに着目させる。
		〔読みのめあて〕 語り手のわたしは，「ごんぎつね」のお話の何が強く心に残っているのだろう。	
読みのめあての答え	2 3	1　読みのめあてに沿って全文を読み通し，読みのめあての答えを書きまとめる。 (1) 一行空きと挿し絵を手がかりにし，ごんの言動を中心にあらすじをとらえる。 (2) 各場面でのごんの言動と気持ちを書きまとめる。 (3) 各場面のごんの気持ちをつないで，語り手の心に残ったものを自分の読みのめあての答えとして書きまとめる。 2　個人の読みのめあての答えを交流し，読みのめあての答えを方向付ける。	○　一行空きと挿し絵を手がかりにすることで，全文が６つの場面に分けられることに気付かせる。 ○　各場面でのごんの言動にサイドラインを引かせ，そこから分かるごんの気持ちを書き込ませる。
		〔読みのめあての答えの方向〕 語り手のわたしは，ごんのひとりぼっちのさみしい心が心に残った。	
学習計画	4	1　各場面で何を読み確かめていくのかを確認し，学習計画を立てる。 (1) 各場面の中心文を決める。 (2) 中心文を基に，何を読み確かめていくのか話し合う。	○　読みのめあての答えの違いから，根拠となる叙述の重なりや違いを整理させ，中心文から何を読み確かめていくのかはっきりさせる。 ○　どの叙述を中心に何を読み確かめるのか，学習計画表として掲示する。
		〔学習計画〕 ①　いたずらばかりするごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を確かめる。 ②　ほらあなの中で考えるごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を確かめる。 ③「おれと同じ，ひとりぼっちの兵十か。」と思うごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を確かめる。 ④　つぐないをくり返すごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を確かめる。 ⑤「～引き合わないなあ。」と思うごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を確かめる。	

		⑥　ぐったりと目をつぶったままうなずいたごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を確かめる。	
読み深め・確かめ	5 6	いたずらばかりするごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめよう。	
		1　いたずらばかりするごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。 (1) ごんの生活の様子について話し合う。 ○　家族や友達がなく，ひとりぼっちで生活していることに気付くこと。 ○　いたずらをくり返す理由についてとらえること。 (2) いたずらとひとりぼっちで生活していることをつないで話し合う。 2　読み確かめたことをもとに，自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。	○　ひとりぼっちのごんの生活の様子や状況を想像させ，いたずらをくり返す理由や気持ちを考えさせる。 ○　いたずらの中身を話し合う時に，「ほり散らしたり」「むしり取って」の言葉に立ち止まらせ，「ほったり」「むしったり」と比べさせることで，ごんのいたずらが，どれほどひどいものだったのか，村人の立場からも考えさせる。 ○　家族や友達がなく，ひとりぼっちで生活していることと，くり返しするいたずらをつないでごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。
		ひとりぼっちのさみしさを紛らわすため，村中の話題になって，自分に関心をもってほしいと思うごんのひとりぼっちのさみしい心。	
	7 8 【本時】	ほらあなの中で考えるごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめよう。	
		1　ほらあなの中で考えるごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。 (1) うなぎのいたずらについて話し合う。 ○　ごんにとっては今までのいたずらと同じであることをとらえること。 (2) うなぎのいたずらだけを反省している理由について話し合う。 ○　叙述とつないで，兵十をひとりぼっちにしてしまったというごんの思い込みであることをとらえること。 2　読み確かめたことをもとに，自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。	○「～ちがいない。」「～だろう。」という文末の言葉に立ち止まらせ，ごんが思い込みで反省し，後悔し始めていることに気付かせる。 ○「おっかあ」という言葉が繰り返されていることに気付かせ，兵十をひとりぼっちにさせてしまったというごんの気持ちが強く表れていることに気付かせる。 ○　思い込みと前場面のごんの気持ちをつないで，ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。
		自分が今までひとりぼっちでさみしくてたまらなかったから，兵十をひとりぼっちにしてしまったのは自分せいだと思い込むごんのひとりぼっちのさみしい心。	
	9	「おれと同じ，ひとりぼっちの兵十か。」と思うごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめよう。	
		1「おれと同じ，ひとりぼっちの兵十か。」と思うごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。 (1) 何が同じなのか話し合う。 ○　おっかあがいないことは同じであるが，ごんはきつねで兵十は人間であることや，兵十には友達や村人がそばにいることが違っていて，ごんの思い込みであることをとらえること。 (2) 文末からごんの気持ちを話し合う。	○　兵十の位置・距離を読み取り，ごんが兵十のそばに近付いていることに気付かせる。 ○　読点を読み，ごんが兵十のことを自分と同じ境遇だと強く思い込み，確信したことを読み取らせる。 ○「ひとりぼっちの兵十か。」の文末を読み，ひとりぼっちにさせたことが自分であることを確信し，後悔しているごんの気持ちを読み取らせる。

	○　文末「か」に込められた後悔している気持ちをとらえること。 2　読み確かめたことをもとに，自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。	○　話し合ったことをもとに，ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。
	ごんは，おっかあがいないことを何よりもさみしいと思っている。だから，おれと同じと言い，おっかあが死んだのは，自分のせいだったと確信した。でも，兵十にはおっかあがいなくても，友達や村人がそばにいてくれるが，ごんには誰一人そばにいてくれる人がいない。それなのに，兵十と自分を同じだと勘違いするごんのひとりぼっちのさみしい心。	
10 11	つぐないをくり返すごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめよう。 1　つぐないをくり返すごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。 (1) 兵十に何度もくりや松たけを持って行ったごんの気持ちを話し合う。 ○　くり返しつぐないに出かけていることをとらえること。 (2) つぐないをくり返す理由を話し合う。 ○　つぐないの中身が変わっていることをもとに，ごんの気持ちが，兵十に自分の存在に気付いてほしい，自分の思いを分かってほしいという気持ちに変化していることをとらえること。 2　読み確かめたことをもとに，自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。	○「次の日も，その次の日も～」や「まず一つ」を基に，一生懸命つぐないを続けるごんのさみしい気持ちを考えさせる。 ○「持ってきてやりました。」と「いきました。」を比べ，つぐないを続けながらも，兵十の気持ちを変えたいと思うごんの様子に気付かせる。 ○　いわし→くり→松たけとつぐないの内容が少しずつ変化していることから，ごんの兵十を思う気持ちも変化していることに気付かせる。 ○　話し合ったことをもとに，ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。
	うなぎのつぐないが，なんとしても自分の存在と思いを分かってほしい，兵十の気持ちを変えたいという思いに変わり，つぐないをし続けるごんのひとりぼっちのさみしい心。	
12 13	「～引き合わないなあ。」と思うごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめよう。 1「～引き合わないなあ。」と思うごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。 (1) 兵十と加助の後をつけていくごんの様子を話し合う。 ○　兵十とごんの距離が近くなっていることをとらえること。 (2)「～引き合わないなあ。」と思うごんの気持ちを話し合う。 ○　自分のつぐないに気付いてもらえず落ち込むごんの気持ちを想像すること。 2　読み確かめたことをもとに，自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。	○　兵十の後をつけるごんの様子から，兵十のそばに行き，兵十が自分のことに気付いているかもしれないと期待しているごんの気持ちを読み取らせる。 ○「こいつは」の指している内容を考えさせる。 ○「おれ」の繰り返しから，自分に気付いてもらっていなかったことに落胆しているごんの気持ちに気付かせる。 ○　話し合ったことをもとに，ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。
	自分に気付いてほしいと期待していたのに，兵十に気付いてもらっていなかったことが分かり，期待が裏切られ，がっかりしているごんのひとりぼっちのさみしい心。	
14 15	ぐったりと目をつぶったままうなずいたごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめよう。 1　ぐったりと目をつぶったままうなずいたごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみし	○　ぐったりと目をつぶったままうなずいたごんの気持ちを，引き合わないなあと思っ

		い心を読み確かめる。 (1) ぐったりと目をつぶったままうなずいたごんの気持ちを話し合う。 ○　ごんがうなずいた気持ちをとらえること。 (2) 青いけむりが，まだつつ口から細く出ていた時の，ごんの様子と兵十の気持ちを話し合う。 ○　今にもごんの命が消えそうなことをもとに，死をもってしか気付いてもらえなかったごんのひとりぼっちのさみしさと，自分の手でうってしまった兵十の後悔を，兵十が引きつぐであろうことをとらえること。 2　読み確かめたことをもとに，自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。	たのに，明くる日も兵十の家に出かけたことや，今までと違って家の中に入ってくりを固めて置いたことを，前場面までの読み取りとつないで考えさせる。 ○　青いけむりが出ている間にごんの頭の中には，兵十への今までの思いが思い出されていることを想像させる。呼称の変化から，兵十に自分の存在にやっと気付いてもらったものの，ごんの死が迫っていることに気付かせる。 ○　兵十が驚き，後悔している様子を想像させ，ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。
		死をもってしか兵十に気付いてもらえなかったごんのひとりぼっちのさみしい心。兵十は，自分の手でうってしまった後に，ごんのひとりぼっちのさみしい心に気付き，取り返しのつかないことをしたことを後悔し続けるであろう。ごんと兵十，両者の心が通い合うことが遅すぎた切なさ，やるせなさが語り手の心に残った。	
	16		
		読み取ってきたことをもとに，語り手の心に残ったものを題名とつないでまとめよう。	
		1　読みのまとめをする。	○　ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身がどのように詳しくなったのか，確かめたことと題名をつないで読みのまとめをする。
		自分のことに気付いてほしい人とかかわりたい，兵十と分かり合いたいと願っていたごんだったが，死をもってしか兵十に分かってもらえなかった。ごんと兵十，両者の心が通い合うことが遅すぎた切なさ，やるせなさが，ごんのひとりぼっちのさみしい心として語り手の心に残った。	
		2　読み方のまとめをする。 ○　言葉をはずして読む ○　呼称の変化を読む ○　似た言葉と比べて読む ○　繰り返しを読む ○　文末表現を読む ○　場面と場面をつないで読む	○　学習した読み方を振り返り，これからの学習に活用することができるようにする。

5　本時　　平成20年11月10日（月）

6　本時の目標　（８／16）

○　あなの中で考えるごんの気持ちからごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめることができる。

●　文末表現に着目して人物の気持ちを読む，場面と場面をつないで気持ちの動きを読む読み方を身に付けることができる。

◎　中心文を基に読み取ったごんの気持ちを，何かを後悔した自分の経験とつないで，ごんのひとりぼっちのさみしい心に対する自分の考えを創ることができる。

7　本時指導の考え方

前時に，児童は，ごんの生活の様子や境遇，いたずらをくり返す理由を考え，ひとりぼっちのさみしさを紛らわすため，村中の話題になって自分に関心をもってほしいという，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめている。

本時は，「ちょっ，あんないたずらをしなけりゃよかった。」と思うごんの気持ちから，兵十のおっかあの死を自分のせいだと思い込み，後悔し，自分を責めるごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる学習である。

そのために，まず，中心文から，ごんが「あんないたずら」と思ったいたずらの中身を確認する。そのいたずらは，10日も前のいたずらであること，いたずらの中身は，前時に読み取ったいたずらと何ら変わりのないことを読み取る。次に，なぜこのいたずらだけ後悔したのかその理由を考える。その際，兵十のおっかの葬式を見たことをきっかけに，いたずらを後悔していることに着目させる。「…言ったにちがいない。」「…死んじゃったにちがいない。」「…思いながら死んだんだろう。」の文末表現を読み，ごんが勝手に思い込んでいることをとらえさせる。そして，なぜ，そのような思い込みをしているのか考え，話し合う。その中で，ごんには相談する相手がいなかったこと，兵十のおっかあがなくなったのは自分のせい，つまり，兵十を自分と同じひとりぼっちにさせてしまったという思いがあることをとらえさせる。また，前場面の読み取りとつないで，兵十にひとりぼっちのさみしさを味わわせてしまうという思い込みから，自分を責め始めていることに気付かせる。

最後に，本時で読み取ったごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を深めるために，自分の経験を振り返らせる。自分もごんのように後悔した経験がないか，その時にどんな気持ちだったかを振り返らせ，自分の気持ちとごんの気持ちの相違点から，ごんのひとりぼっちのさみしい心に対する自分の考えを書きまとめさせる。

○　自分の考えを創る視点

「ちょっ，あんないたずらをしなけりゃよかった。」と，ごんの後悔している気持ち

○　自分の考えを創る手順

【ア　思考の筋道】

①　中心文と，それにつながる文の文末から，ごんが後悔している気持ちと，その理由を考える。

②　自分が何かを後悔した時の経験を振り返り，その時の自分の気持ちを出し合う。

③　自分の気持ちとごんの気持ちの相違点から，ごんのひとりぼっちのさみしい心について自分の考えを創る。

【イ　書きまとめる内容】

①　本時で読み取ったごんの気持ち。

②　後悔した自分の経験と，その時の気持ち。

③　相違点をもとにしたごんのひとりぼっちのさみしい心に対する自分の考え。

検証の視点
○　ごんのひとりぼっちのさみしい心について，自分の考えを創る手立てとして，視点と手順は有効であったか。

8　本時の展開

学習活動と内容	指導上の留意点
1　本時学習のめあてを確かめる。 ○　学習計画をもとに，うなぎのいたずらだけを反省するごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめることを確認する。 〈学習のめあて〉	○　前時までの掲示物を用いて，前時内容を振り返り，本時学習の見通しをもたせる。 ○　前時の書き込みをもとに，自分の考えとの共通点や相違点を明らかにしながら，話し合いを進めていくことを確認する。
あなの中で考えるごんの様子から，ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめよう。	
2　中心文，「ちょっ，あんないたずらをしなけりゃよかった。」と思うごんの気持ちを話し合う。 (1) あんないたずらとはどんないたずらか話し合う。 ○　10日前のいたずらのことを思い出していることをとらえること。 ○　いたずらの中身は，前時に読み取ったいたずらと変わらないことをとらえること。	○　いつの話のことなのか，時を表す言葉に着目させる。 ○　前時までに話し合ったことや，いたずらをくり返すごんの様子，気持ちと比べて，うなぎのいたずらが，今までのいたずらと何の変わりもないことに気付かせる。
(2) あなの中に帰ってからのごんの気持ちを考える。 ○　ごんが考えていることは，ほとんどがごんの勝手な思い込みであることをとらえること。 ・　文末表現を読む 「…うなぎが食べたいと言ったにちがいない。」 「…おっかあは，死んじゃったにちがいない。」 「…思いながら死んだんだろう。」	○　ごんの心内語の７つの文に着目させ，それぞれの文が真実であるのか，ごんの思い込みであるのかを考えさせる。 ○　文末表現に着目させ，ごんの決めつけや予想から，ごんが自分勝手に思い込んでいることに気付かせる。
(3) なぜ，思い込みをするのか考え，話し合う。 ○　ごんには相談する相手がいなかったことをとらえること。 ○　ごんが，おっかあの葬式を見たのをきっかけに，兵十を自分と同じひとりぼっちにさせてしまったと思い込み，自分を責め始めていることをとらえること。 ・　場面と場面をつないで読む	○　なぜ，このような思い込みをごんがしてしまうことになったのか理由を考えさせるために，前時のごんのひとりぼっちのさみしい心とつないで考えさせる。 ○　ごんの勝手な思い込みが，兵十を自分と同じひとりぼっちにさせてしまったという気持ちを生み，自分を責め始めていることに気付かせる。
3　ごんのひとりぼっちのさみしい心について自分の考えを創る。 (1) 何かを後悔した経験を振り返り，その時の気持ちを出し合う。 (2) 読み取ったごんの気持ちと比べ，自分の考えを創る。 ○　ごんの後悔と自分の後悔の質，深さの違いに気付くこと。 (3) 書きまとめ，発表する。	○　何かを後悔した経験を数名に発表させ，それをもとに，自分の経験を振り返ることができるようにする。 ○　後悔した時の自分の気持ちとごんの気持ちを比べ，ごんの後悔の気持ちが，自分以上に深く，重いことをとらえさせる。 ○　板書を見ながら，話し合ったことをまとめ，自分の経験と比べてごんのひとりぼっちのさみしい心に対する考えを書きまとめさせる。
ごんは，自分が今までひとりぼっちでさみしくてたまらなかったから，兵十を自分と同じひとりぼっちにしてしまったと，思いこんで自分を責めるごんのさみしい心が分かった。 私も，やってはいけないことをしてしまって，お母さんに怒られたり，友達の悲しい顔を見たりして，やらなければよかったと反省したことはあるけど，許してもらえて解決して，ごんみたいに自分を責めたことはないです。ごんは，たった一人であなの中で自分を責めて，ひとりぼっちでさみしくてたまらなかったと思います。	